



ミハル通信(株) 企画部 主査 小笠原 顕也

## 送る側も見る側もすべてデジタルに！ ミハル通信(株)がホテル映像情報システムの 真のデジタル化を可能にする

これまで主にケーブルテレビ向けの各種伝送機器のリーディングカンパニーとして製品を開発してきたのがミハル通信(株)。いわゆる映像コンテンツを発信する側だった同社が、今回は受信側であるホテル館内放送のデジタル化にターゲットを絞ってリリースしてきたのがMR3000XとMR5000Xだ。今回の開発に至った経緯とその狙いを同社の企画部主査の小笠原顕也氏に聞いた。



MR3000XとMR5000X。どちらもハーフラックサイズのコンパクトなボディにオールインワンの機能を持つ

地デジ対応はテレビを  
替えるだけでは終わらない

アナログのテレビ放送が終了し、すべてデジタル放送に切り替わるまでいよいよ2カ月を切った。しかし何をもちて地デジ対応がされたと判断するのか、基準がまちまちなため、ホテルの現場はまだまだ混乱しているのが現状だ。

「仕事柄、展示会などに多数出展し、ホテルに宿泊することも多いのですが、実際に利用して驚いたのは、地デジ対応のテレビで、普通のTV番組はデジタルの高画質で視聴できるのに、お客様向け有料放送がまだアナログ映像だったことです」と語るのは前述の小笠原氏。

「そこでホテルの映像情報システムをきちんとデジタル化する製品を開発しようということになりました」

「価格3分の1」が  
合言葉の製品開発

そこから開発を始めて製品化されたのが今回ご紹介する「MR3000X」と「MR5000X」の2機種。前者は主にインフォメーションなど自主放送向け製品

で、自主放送番組を地上デジタル放送と同じ方式(OFDM)に変換することにより、館内の地デジ対応テレビで視聴することを可能にする。後者はスカパーチューナーを内蔵することにより、受信したCS放送を同様にOFDMに変換するシステムとなっている。

「デジタル化が進まない理由はやはり機器の価格でした。これを3分の1にすることを目指し、今回は根本から徹底した見直しを図り画期的なコストダウンを実現しました」と小笠原氏は語る。

また今回の製品の特長は、通常は受信器、変調器といったそれぞれバラバラに存在していた機器を1台にまとめたオールインワンタイプだということ。しかも価格ばかりではなく大きさも従来機器の2分の1とコンパクトになっており、従来の機器ラックに簡単に収まるのもありがたい。導入する側にとって見れば、多くの機材を必要としない分、イニシャルコストを抑えられ、かつ接続不良といったトラブルも回避できるのが魅力だ。

「もちろんこれまで製品を供給してきたのが放送関連でしたので、『放送を止めてはいけない』商品コンセプトが大前提となつていきます。ですから今回の製品も安心してご利用いただけると思います」

デジタル環境を整備するために

ただ、ミハル通信はあくまで機器メーカーであり、「実際に「MR3000X」や「MR5000X」を導入する場合には、まずは現在館内の映像情報システムを担当している会社に相談して下さい。当社の製品を使って必ずいいご提案がいただけると思います」と小笠原氏。

異業種参入とはいえ、デジタル映像の世界では先駆的な同社が、今後どのような製品をリリースするのか注目してみたい。



ホテルズジャパン2011での同社のブース。数多くの来訪者があり、詳しい説明を求めた。同社は6/8(水)~10(金)まで幕張メッセで開催される「IMC Tokyo 2011 - Interop Media Convergence」にも出展予定。詳しくは<http://www.imctokyo.jp/about/index.html>

●問い合わせ先

ミハル通信(株) 企画部

神奈川県鎌倉市岩瀬1285

☎0467・44・9111

<http://www.miharu.co.jp/>